

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準2. 学生  
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 （ a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 ）	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 （次年度計画及び中期的計画）
<b>① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備</b>				
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	全学教育委員会、学生支援等連絡会など、学修支援にかかわる全学委員会や各学部教務委員会、学生委員会については、教員、事務職員の両方が出席して、意見交換・議論を行い教学にかかわる議論をしている。ボランティア体験、ハラスメント防止などに関わる授業や学修支援センターの運営には、教員だけでなく、事務職員も大きく関与している。	a：教員と事務職員が協働して学修支援を行うしくみが確立しており、今後これをさらに発展させる。	他の大学での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して、学修支援にあたる。	-----
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	四肢の障害、視覚・聴覚障害を持った学生に対しては、事前に講義を担当する教員へ連絡をし、講義を受講するにあたり必要な講義資料を電子的に作成したり、学生へ事前配布を行い、十分な配慮を実施した。一方、発達障害など精神面や大学生活に障がいのある学生に対しては、対応のできる範囲で、個別指導や個別の学修環境の提供などを行ってきた。また、入学前に保護者から状況の説明と希望対応法を聞き、対応可能な事項について配慮を行ってきた。	a：教職員にむけ「障害者差別解消法」に関する勉強会を開催。外部講師を招いたFDを通じて、大学教育における「合理的配慮」への理解を高めている。式典における手話通訳の導入を行った。	障がいのある学生の状況を、学務課と学生相談室の連携で把握。さらに、対応方法や講義資料の作成方法などの情報を教員間で共有することで、年度をまたがった包括的な対応が可能となった。これらの情報をデータベースとして共有するシステムの確立を目指す。更に学部内で把握した、障がいのある学生の情報は将来「ヘルスサポート・センター」における専門医やケースマネージャによって一元管理する計画である。	-----
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。オフィスアワーの時間に学生の都合が悪い場合、担当教員と連絡して、早めの対応を心掛けている。	a：シラバス点検時に、よりオフィスアワーに関する記載に注意して点検する。	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」といった記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。	-----
中途退学者、休学者及び留年生への対応策を行っているか。	休学・退学を減少させるために「アドバイザー制度委員会」を設置し、対応策を立案実行している。15名から20名程度の学生に対し、1名の教員を配置し、各学期の最初と最後に個別面談を行い、単位の修得状況、悩み事の把握などを行っている。また、休学・退学希望者に対しては、事前面談を行い、それに至った経緯や学修面での問題抽出を実施し、原因究明と可能な範囲での改善を行い、休学者に対しては復学へ向けたサポートとフォローを行った。	a：進級要件の緩和を行い、さらには学生が躓きやすい授業については、再履修クラスや能力別クラスにするなど、教務面からのサポートを行った。また、学生との個別面談を各学期に行うことにより、状況の把握とサポートを行った。その結果、休退学率は減少している。 b：出席や学修に問題ある学生の原因（例えば精神的問題や人間関係）の特定が困難である。	教務面からとアドバイザー教員による面談によりある程度の効果を実証できているが、さらに効果をあげるため、常時相談ができるWeb相談窓口などの開設を検討している。	出席や学修に問題ある学生の抽出はある程度出席・成績システムを利用することで可能であるが、その原因（例えば精神的問題や人間関係）の特定は困難である。これらの原因特定手法の確立を急務として検討する。
<b>② TA等の活用をはじめとする学修支援の充実</b>				
教員の教育活動を支援するために、TAなどを適切に活用しているか。	実験科目、演習科目、大人数の授業科目などを中心にTAを配置し、教員の監督下で、授業の補助を行っている。また、フレッシュゼミにSAを配置し（ピアサポーター）、同年代の学生の目線を授業運営に採り入れ、入学者が早期に大学生活へなじめるように工夫している。	b：(1)院生が少ないのでTAが不足している。更に、新カリキュラムでは演習が大幅に増えるのでTA不足問題が大きくなる恐れがある。 (2)授業アンケートによって、TAのレベル、評価基準が一致していない科目がある。	-----	(1)進学率を上げる対策を引き続き検討する。外部のTAを増やす方法の検討を行う。 (2)TAの指導を強化する方法を検討する。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準2. 学生  
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備</b>				
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	3年次必修授業キャリアデザインIIIをはじめとするキャリア教育科目の中でインターンシップの意義を伝えるとともに、学外での就業力強化活動への参加を促進するための説明会を定期的実施している。	a : 学部3年次夏休み終了時点で過半数の学生がインターンシップに参加している b : 1day等の短期参加が大半を占めており、より長期での参加を促す必要がある。	インターンシップにおける具体的な体験内容とその効果についての情報を集約し、参加に対する学生の意識向上を図る。	書類や面接等による選考を伴う競争的なインターンシップへの参加を促すとともに、選抜試験への対策を強化する。
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	卒業課題を実施する研究室における相談・助言が有効であることに鑑み、自身に合った研究室を選択する上での情報提供をキャリアデザインの視点から実施している。また、就職指導を専門的に行う特任教員による進路相談を随時受けることができる体制をとることで、実践的な進路指導を行っている。	a : 就職内定率が安定して95%を上回り、学部特性を反映した就業となっている。 b : 進路先に関する情報不足や自己の過小評価によるミスマッチが散見される。	就職・進学に対する研究室の特性を学生に的確に伝える説明会や情報揭示の充実を図る。	進路先に対するミスマッチの現況を分析するとともに、研究室間での情報共有を進めることで年々多様化が進む選抜試験や実施時期への対応を図る。
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	各大学にて公表しているホームページや統計資料等を通じて、移り変わりの激しいICT業界での効果的なキャリア支援についての情報収集・分析を行い、学内での業界研究会を開催することで進路指導の質の向上に努めている。	a : ICT業界における大手・準大手企業への就業が増加傾向となっている。 b : 学生への情報伝達が十分でないことに起因すると思われる逸機が散見される。	研究活動の中で個々の研究室が収集した情報を効果的に集約し、進路指導へ生かす仕組みの導入を図る。	個々の進路先分野に特化した研究室からの情報を学部全体で共有し、学生の機会喪失を防ぐ。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準2. 学生  
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 学生生活の安定のための支援</b>				
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能させているか。	学務課・学生係において、学生サービスの実施を一元的に把握、厚生補導のための施策を行っている。また、学部内に学生委員会を組織し、学生委員長を中心に日常的な学生への配慮と指導を行っている。さらに、学生委員会内には「アドバイザー制度委員会」を置き、さらに詳細な指導を行っている。	a : 「アドバイザー制度委員」はアドバイザー教員と連携し、学生生活の向上のために周密な観察指導を行なっている。 b : 専門家によるサポート体制の充実	「アドバイザー教員」が把握する学生に関する情報を、一元管理活用することで学生サービスのさらなる向上につなげる。	学生相談室と医務室との連携から「ヘルスサポート・センター」に改組することで、臨床心理士など専門家によるアドバイスも受けられるようにする。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	経済的支援を必要とする学生や学修意欲の高い学生、私費留学生などに対して、広く平等に修学の機会を与えるため、公的あるいは大学独自の各種奨学金の公募審査を行なっている。災害発生時には「自然災害における学費減免」などの支援制度を設けている。学費の分納・遅延対応にも柔軟に対応している。その他「私費外国人留学生授業料減免制度」や優秀学生への「学長賞/学部長賞」などの奨励金制度も設計した。その他、地方公共団体の奨学金、東京工科大学同窓会奨学金などについて、随時学生への紹介を行っている。	a : 海外の大学から受け入れた私費留学生への授業料減免。各学部での成績優秀者への褒賞。「奨学生入試」制度を開始、入学時からの成績優秀者への奨励を開始した。	経済的な問題を抱えつつも、成績優秀である学生に対して、より幅広い支援制度について検討していきたい。	奨学生でありながら、成績不振のため留年となり、学業を続けられないというケースを未然に防ぐ施策を考えたい。
学生の課外活動への支援を適切に行っているか。	学生の自主的な活動としての、各種イベント（文化祭/スポーツ大会/音楽祭等）やサークル活動に対して実施運営のサポートや予算管理の指導を行なっている。学生間で円滑な活動が行われるよう、各種イベントの実行委員や、サークルのリーダー（部長/会計）に対して、リーダーズキャンプを開催して育成指導している。	a : 学園祭（紅華祭）やスポーツ大会では、学生による自主運営と独自企画をサポートし学生の創意工夫によるイベントを実現。	日頃、対人関係に自信のない学生や社会生活に馴染めない学生を、各種課外活動を通じた経験の中で成長させる仕組みを発展させていきたい。	学生による「企画力」の低下、リーダーシップのとれる人材の不足が懸念されている。発想豊かな人材育成の施策が必要。
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	学務課・学生係と各学部における教務委員会が連携しながら、学生の心身に関する健康相談を受け付けている。日常的には「アドバイザー教員」が学生生活における相談の窓口となるほか、学生相談室における相談員が専門的なアドバイスを与え、心的支援を行っている。また、教員の障害者差別解消法への理解を深め、対象となる学生に対する、対処法や教授法、講義の実施方法について学部内のFD活動で議論し、情報の共有を行った。	a : 授業や演習における「グループワーク」が苦手という学生には、個人作業の機会を与えるなどの配慮を進めた。また、卒業発表などでは、合理的配慮という観点から、それぞれの学生に適合した方法で実施を行った。	アクティブラーニングの良さを継承しつつも、学生自身のメンタルコンディションに配慮しつつ、多様な学修の機会を与えるようにしたい。	該当する学生の抽出が非常に困難である。また、内向的な学生の場合、教員側が受け身の体制では、それを把握することは困難である。学生の出席状況や成績などを総合的に判断しつつ、個別面談を実施しながら、該当する学生の抽出と対応が必要である。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準2. 学生  
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	授業アンケートを全科目で実施している。また、在学生調査を各学年(新2年生、新3年生、新4年生)において実施している。さらに学修支援センターでは学修の問題を抱える学生の相談に個別に乗ると同時に、学修支援センター指導員、学務課職員、教員による懇談会を年2回実施している。主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。回答は、学生ポータルサイトに掲載している。	a：2018年度より、授業アンケートおよび在学生調査の調査項目を見直し、データ取得方法を紙ベースからWebベースに変更した。 b：学修ポートフォリオの整備による学生自身による学修振り返りとその内容の教員による把握を進めることが必要である。	授業アンケートや在学生調査で取得したデータはIRセンターでの解析をすすめる。	学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。
<b>② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	学生委員会として、各学期が始まる前と最終回にて、学生生活における悩み、学修面での問題、ハラスメント関連などのアンケートを行っており、アンケート内容に応じて学生委員会より学生個人に連絡を取り個人的にサポートを実施している。また、常時学生からの意見や相談、悩みを投稿できるWeb相談窓口の設置の検討を行っている。	a：アンケート実施とそれに対するサポートを学生委員会とアドバイザー教員と連携して行っており、迅速かつ細やかな問題把握とフィードバックが可能となっている。	現在は、年に数回のアンケートの実施にとどまっているが、よりこのサポートを充実させるため、常時学生が相談できるようなWebベースの意見箱設置の検討を開始している。	内向的な学生に関しては、直接教員や職員へ悩み事を相談することができないのが実情である。そのような学生に対しても気軽に相談できるような電子的な窓口の設置は急務である。また、ネット上での人間関係トラブルに関する対応も急務である。
<b>③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</b>				
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	学務課学生係の窓口、学内に設置されている意見箱、上記②のアンケート実施など、多様なチャンネルを通じて学生からの意見や要望を収集している。特に、教室環境やインターネット環境に関する要望は、聞き取り後即座に業務課やメディアセンター委員会、クラウドサービスセンターへ連絡し、改善、対処を行っている。同時にこれらの要望は、アドバイザー制度委員会で議論し、全学的・学園的に対応している。	a：学内のトラブルや犯罪に繋がる老朽化した施設の改善に学生からの要望を取り入れている。食堂業者の選定、メニューの改善にも学生の意見を参考にしている。	今後はより積極的な聞き取り調査やアンケートなどを行い、学生の要望を多角的に集約検討していきたい。	学生に対して、施設・設備の利用時のトラブルを防ぐために、施設利用の指導を行うとともに、今後もより安全で快適な環境整備のために学生からの意見を収集する。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準3. 教育課程  
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知</b>				
<b>①-1 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。</b>				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のディプロマポリシーを定めている。さらに、大学共通のディプロマポリシーに専門的能力を具体化した形で、学部ごとにディプロマポリシーを定めている。大学院については、専攻ごとに定めている。	-----	-----	-----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧（大学院学生便覧）において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----
<b>② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知</b>				
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知しているか。	各科目とディプロマポリシーに定めたラーニングアウトカムズの対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、科目ごとの到達レベルをシラバスで記述している。1年から2年の進級要件および卒業課題の着手要件を定め、学修状況に応じた科目履修を進めるとともに学修が困難な学生の早期の発見に努めている。卒業認定基準は所定の科目の履修によって認定しており、各科目で定めたラーニングアウトカムズとの対応の相対でディプロマポリシーを保証している。進級要件、卒業要件は、学生便覧に記載し、学生および教員に配布している。カリキュラムマップは、1年生に配布する履修案内およびウェブに掲載している。	a : 卒業課題の着手要件の見直しを進めている。	卒業課題の着手要件について、進級率、卒業実績などのデータをもとに、継続的に見直しており、2019年入学者から新たな要件に見直した。	-----
<b>③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準の厳正な適用</b>				
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準(成績評価基準)を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、全学教育委員会を通じ、学部教務委員会、学部教授会で教員へたびたび周知している。卒業認定については、学部教務委員会および教授会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	a : 学部教務委員会、教授会、学務課が相互にチェックしあいながら、厳正な基準の運用ができています。	教職員が高い意識を保ち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。	-----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を学部教授会およびアゴラで確認することにより、現状カリキュラムの問題点を共有している。学術や社会の変化に加えて、各科目の単位取得状況、退学率、進級率をモニタリングすることによって、カリキュラムの継続的見直しを学部教務委員会が中心となり、4年に一度の頻度で行っており、その見直しの全学的な調整を全学教育委員会がおこなっている。	b : 各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされているのか評価がされていない。	-----	ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	担当教員による判断のばらつきが出ないように、成績分布に関してガイドラインを設定し、全科目の成績分布を教授会もしくはアゴラで確認することにより、教員相互にチェックしあっている。GPAを算定し、成績表によって学生へ周知するとともに、GPAを単位の上限キャップの緩和、早期卒業制度の適用、コースの決定、研究室の決定に活用している。	b : (1)評価基準の統一を一層進める必要がある。とくに卒業論文/卒業研究の評価の統一が望まれる。 (2)担当が多い科目（フレッシュゼミ、卒業課題）にばらつきが見られる。 (3)選抜クラス、優秀者クラスについてガイドラインがない。	-----	ループリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。 b1 : 担当が多い科目でも成績評価の公平性について引き続き教務委員会から指導を行う。 b2 : 選抜クラス、優秀者クラスの扱いをガイドラインに追加する。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準3. 教育課程  
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① カリキュラム・ポリシーの策定と周知</b>				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、学部のカリキュラムポリシーを定めている。	b : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく。	-----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----
<b>② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性</b>				
カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、全学部共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に学部の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	-----	-----	-----
<b>③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成</b>				
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	全学共通のカリキュラム上の特徴としては、フレッシュャーズゼミを1年次に配置し、少人数クラスによるクラス担任制と一体となった運営をしている。学部で提供する専門基礎科目、専門科目では、講義のほかに、実験科目、演習科目、卒業研究、学外実習などを効果的に配置している。	a : コンピュータサイエンス学部における専門分野の知識を十分に修得できている。	-----	カリキュラムを大幅変更し、2019年度からのカリキュラムでコンピュータサイエンス学部における専門分野の知識、すなわちプログラミング、各種アプリケーション開発に関する先進的技術(スキル)を学び、ICT分野の基盤となる知識をコア講義科目群で学修する。コンピュータサイエンス学部の特徴ある演習・実験を必修科目や選択必修科目として配置し、先進的なICT分野の実践的な応用力を身につける。
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応、などまで含めて、記載内容を明確に教員に徹底している。書かれたシラバスは、学部の教務委員長が中心となり、記入者以外の教員がチェックし、また、事務職員も内容を確認している。	b : 複数の担当者がある科目の場合、共通シラバスに明確になっていない部分が多くなっている科目がある。	-----	共通シラバスの記入について、教務委員会からの指導を強化する。
<b>④ 教養教育の実施</b>				
教養教育を適切に実施しているか。	八王子キャンパスの4学部においては、ほぼ共通の教養教育カリキュラムを編成している。コンピュータサイエンス学部においても、外国語、自然、人文社会、ウェルネスの各科目群と社会人基礎科目の一部の企画、立案、実施を教養学環が担当しており、学部との調整を綿密に行っている。海外語学研修などの海外プログラム、スキー実習など特色ある科目も提供している。	a : 教養教育科目の各学部との連携の強化 b : 教養教育全体像の可視化と公開	従来より、教養教育科目の教育は学部との連携によって行われてきたが、今後も連携と自主性のバランスを保ちながら、教養教育を実施する。	同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。
教養教育を担当する組織の活動状況等を適切に把握しているか。	教養学環は、独自の教授会、独自の教務委員会を持ち、大学評議会、教育力強化委員会、企画推進委員会そのほかの全学の委員会に独自の委員を参加させている。また、学修支援センターの運営に大きく関与している。	a : 教養学環の組織の維持・活性化の促進 b : 教養教育の目的・目標の教養教員全体での共有と目標達成への協働の促進	新任教員を補充する際には、担当科目の専門性を有していることはもちろんのこと、各種の学外研修など多面的な教養教育活動を支えることができる教員を積極的に採用する。	2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準3. 教育課程  
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施</b>				
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、反転授業、グループ学修、プロジェクトベースドラーニング(PBL)について、全教員が参加する全学教職員会でその手法を紹介し、授業ごとのこうした手法の活用の有無について、教員への授業方法アンケートでモニタリングしている。これらのうち、アクティブラーニングについては、教員による授業評価の評点項目としている。	a : 授業方法アンケートの教員への実施 b : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。	授業方法アンケートを継続的に実施し、IRセンターにおいて結果の解析を行う。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	教育力強化委員会を設置し、主として、教員による授業評価の実施および結果の報告、教員研修、学生による授業アンケートの集計、教員の各授業での成績分布のモニタリングとフィードバックなどの業務を担っている。	a : 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。 b : 授業アンケート結果や成績分布をもとにした授業の改善が十分ではない。	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。	学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。
履修登録単位数の上限の適切な設定など、単位制度の実質を保つための工夫が行われているか。	学期ごと24単位を履修上限とし、特別に成績優秀者に対して、28単位までの履修を認めている。15週の授業時間を講義曜日にかかわらず確保し、休講に対する補講期間を設けている。シラバスに準備学学修の欄を設け学生の予習・復習内容を具体的に指示・明記している。実際の授業外学修時間を授業アンケートによってモニタリングしている。	a : 授業外学修時間のモニタリングを授業アンケートの中で開始した。 b : 15週の講義期間をとる場合、再試験と学外実習(ボランティアや海外語学研修など)の期間が重複する。	授業科目ごとに、授業外学修時間を十分に取れない理由の解析をすすめる。	八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。

自己点検・評価報告書（コンピュータサイエンス学部）

基準3. 教育課程  
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
<b>① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用</b>				
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、就職先の企業アンケートなどにより、学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、卒業率については、事務局学務課、学部教授会、学部教務委員会においてデータをまとめている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび学部就職委員会で評価している。入学時および年度初めガイダンス時に在学生調査を実施し、その結果をIRセンターで解析の上、企画推進会議、学部教授会で報告している。	a : 進級率、卒業率、就職率などの指標が取られ、在学生調査が行われている。 b : 学修成果の可視化において、現在、数値化している指標は取得単位数とGPAのみである。より学修内容が可視化されることが望ましい。また学生輩出先についても就職率以外により就職の質を表す指標が必要である。	進級率、卒業率、就職率、在学生調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課、法人の広報部などに分散しており、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシーの客観試験による評価、卒業論文指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。
<b>② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック</b>				
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	各学生の単位取得状況については、クラス担任が把握し、各学生と半年に一度面談することにより、学生にフィードバックしている。このときに把握した各学生の学修状況が教育内容・方法の改善に役立っている。	a : クラス担任による面談による学生の学修状況の把握 b : (1)カリキュラム改善がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。 (2)教育内容を学修成果によって柔軟的に変更する授業が少ない。	クラス担任による面談の継続的な実施および面談率の向上。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。また、授業ごとの学修成果を把握し、授業の内容を柔軟的に変更できる方法を検討する。